建築講座

保育施設設計にみる子ども用デザインの考え方

－北欧を中心に世界の国を比較してみると－

北浦　かほる
NPO法人子どもと住文化研究センター理事長
（大阪市立大学名誉教授）

２．保育所施設の建築的特徴

イタリアの、レッジョエミリア市の公立保育所は、第2次大戦後に町の人々が子どもの施設をつくる運動から始まり、ローリス・マラグッツイの指導で発展してきました。1963 年に幼児学校が設立され 1970 年に乳児保育所が開設されました。

レッジョの保育では空間に重要な役割があり、子どもの創造性を引き出す環境をつくる工夫がされています。幼児学校(図 1)の平面計画の特徴は玄関ホールを入ると、中央に広場 piazzaとよばれる中心スペースがあり、出会いや各クラスの活動を完成させる場として使われています。

年齢別クラス室が広場の回りに配置され、4歳と5歳児室は小グループで活動出来る様に部屋を3つに分けています。大教室・大アトリエ・ミニアトリエなど、性格の異なる空間になっています。 光を重視して明と暗の空間を使い分け、ガラスの仕切りで自然光を取り入れて、透過光や光の反射で遊ぶ機会をつくっています。アトリエには粘土や絵の具からリサイクル材まで、多様な素材が用意されています(図 2)。

デンマークの保育所は木造か、レンガ造が多く、外構は黒の板塀で周辺の環境に溶け込むデザインです(図 3)。Bornehuset Hundremeter Skoven はクマのプーさんの 100m の森をテーマにつくられた昼間保育所(図 4)です。構造は木造で「リアッケ」という針葉樹を使っています。複雑な平面に見えますがユニットの組み合わせや彩色のし方、トップライト

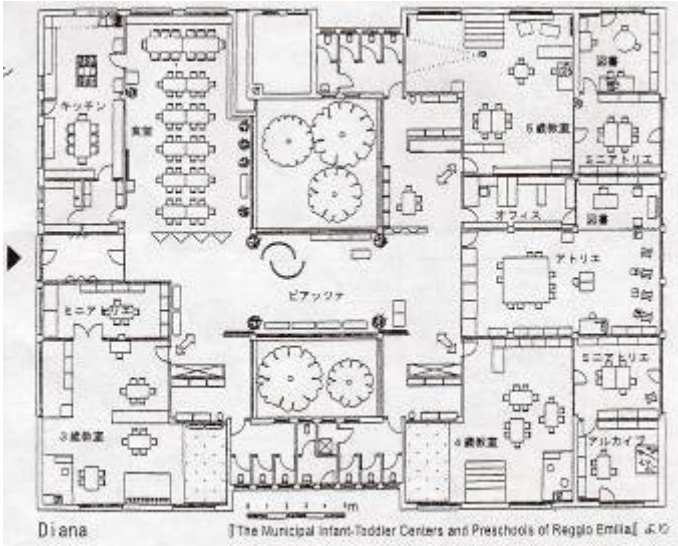

図1　レッジョエミリアのディアナ幼児学校

図2　TOTEM(半公立)のアトリエ

図3　木造保育所の外構

図5　Sundpark Bornehabe 入口

図6　地下の核シェルター

図7 トイレトップライト

図8 少人数の保育室

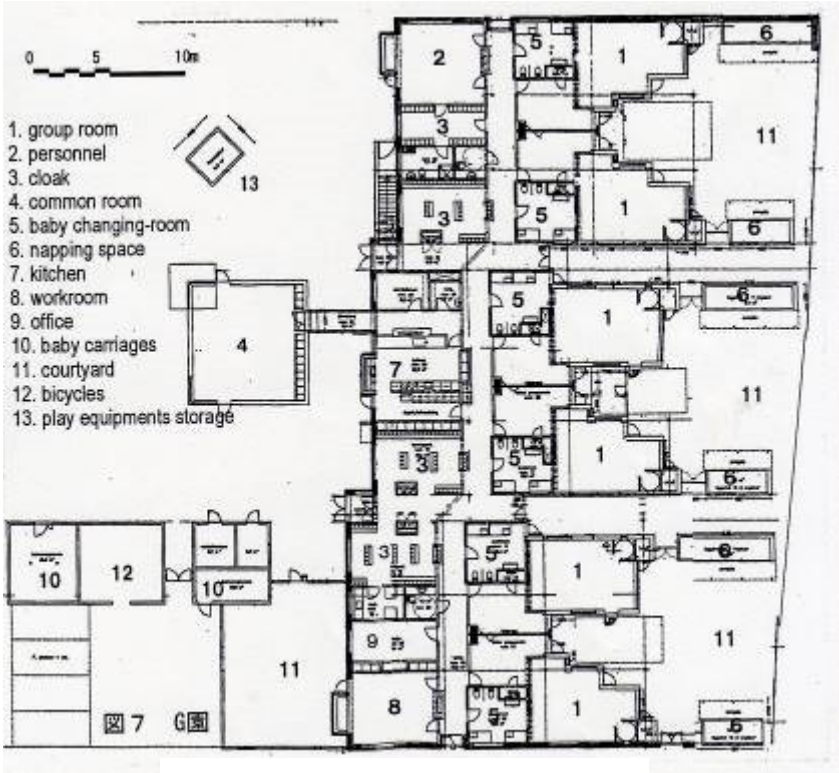

図4　クマのプーさん 100mの森の保育所

図9　パルケアの外観（板塀の内側）

図 12 TMMK 企業内保育所

図 13　TMMK 食事室内

図 10　パルケアの保育室内

図 15　韓国の地下体育室

図　16　韓国の屋根裏夜間

図 11 TMMK 平面図

図 14　TMMKの環境保育

が多用されて明快な空間構成になっています。子どもと近隣アーティストの合作で壁画が描かれていました。

デンマークの新設の保育施設や学校・老人ホームには核シェルターの設置が義務づけられており、RC 造の地下室には非常用備品を蓄えた核シェルター(図 6)がありました。

保育園は平屋が主流で、トイレにトップライトが多用されています（図 7）。保育室は小空間構成で照明器具もそれに合わせてあり、家庭的雰囲気を醸し出していました（図 8）。

アメリカでは公的保育がほとんど期待できず、一般的には非営利・企業・私的・個人などに頼らざるを得ない状況でした。子どもの生活のあり方よりも就学前教育が重視されており、夜間保育が見られたのは例外的な所だけでした。

パルケアは 24 時間国際空港関係者家族と近隣地域の人のために設立された非営利の民間組織で中流と低所得層が対象です(図 9)。 6 月号の平面図で示した様に保育室は小空間構成になっています(図 10)。 子どもの行動を誘発させるように空間をセッティングする「環境保育」を目指して、コーナー毎に機能づけがされていました。 施設の建物 3.25 ㎡/人、園庭 6.96 ㎡/人という州の基準があり、基準を超すと、園庭に出す子どもの数を基準に合わせて減らしていました。

子どもの安全管理については厳重で①レセプションデスクを通す　②出入口は1カ所でオートロック　③連れて帰る人の顔写真の照合等、何重にも安全対策が施されていました。

レキシントンの企業内保育所 Toyota Motor Manufacturing Kentucky(図 11)は、従業員確保のために工場での親のシフトに合わせて保育も3直制になっています。トヨタの資金で建てられ、チェーン方式の保育運営会社ブライトホライゾンズに経営を委託していました。月曜の 5 時～最後の子どもが帰る週末の土曜の早朝 4 時半まで開園しています。室内は図 14 に示すように明快で機能的かつ、コーナ毎の機能をセッティングしたきめ細かな小空間で構成されていました。

学齢以上の子どものためには学童保育にあたる男女別のクラブ室があり、夜間はそこで過ごします。学校や幼稚園へはそこからスクールバスで送り迎えしてくれます。

韓国の保育施設の特徴はどの園でも地下室を活用していたことです。大半の園で食事室や体育室、遊戯室などの大空間が地下に設けられており、サムルノリや太鼓の練習などを行っています(図 15)。 夜間室は単に寝るだけの場と考えられており、屋根裏などにとられていました(図 16)。

■北浦かほる

大阪市大卒。倉敷建築研究所を経て
大阪市大名誉教授。帝塚山大学教授。学術博士。
NPO 法人子どもと住文化研究センター理事長。
居住空間デザイン学及び環境心理学。主著書に
「世界の子ども部屋」「住まいの絵本に見る子ども部屋」「インテリアの発想」「インテリアの地震対策」